



福井大学教育学部
附属義務教育学校

No.05

令和5年3月13日

学校だより

卒業証書授与式 校長式辞より（抜粋）

（略）今日、本校を巣立つ108名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。そして保護者の皆様にはご多用の中、ご参列を賜り、感謝申し上げますと共に、お祝い申し上げます。

振り返れば、皆さんは附属卒業生史上、最も劇的な3年間を過ごしたのではないのでしょうか。後期課程への入学式は、約2か月遅れの令和2年5月29日。ただでさえ慌ただしい年度初め、友達の顔を覚える前に、学年全体討論による学年目標決め。君たちの学年目標「絆のパズルピース」が決定したのは7月31日でした。「絆」は、コロナ禍で人と人の結びつきが危惧されていた世相に臨む気概の象徴に思えます。次はすぐに社会創生プロジェクトのテーマ決めに入り、難航の末「まちづくり」に決定したのは9月14日でした。決定したものの校外学習はできず、悶々とした日々が続いたことでしょう。越前海岸や、倉敷、直島などに出向くことができたのは随分後になってからでした。

歴史的な出来事は、後期校舎改修により、9年生の夏休み明けから福井大学文京キャンパスでの生活が始まったことです。大学という普段と違う環境での約半年間の経験は、もちろん不便なこともあったでしょうが、アカデミックな雰囲気に入れることができ、きっと大切な思い出の一つとなったことでしょう。大学生や大学教授も身近に感じられたに違いありません。そして、移転に伴っての体育祭の5月開催、文化祭の分離開催による学級演劇祭の7月開催、9月のフェニックスプラザでの文化祭。先輩方が聞けば、「そんなことが可能なのか」と、信じられないような顔をするに違いありません。

コロナ禍と文京キャンパスへの移転。「僕の前に道はない 僕の後ろに道はできる」とは、高村光太郎の有名な「道程」の一節ですが、これらの大問題を前にして、君たちは決して諦めず、まさに過去に例を見ない道を次々と切り拓いていったのです。

さて、皆さんは附属で何を学んできたのでしょうか。君たちのレポート集「絆のパズルピース」を紐解くと、その像が浮かんできます。

「まちづくり」について次のように綴った生徒がいます。「8年生の初めに部門で決めた最終地点は『暮らしやすい環境をつくる』だった。今までの活動でこの最終地点にたどり着けたとは思わないが、暮らしやすいまちをつくることについて深く探究し活動を重ねたことで少しでも近づけたのではないかと思う。探究を始めた頃には『まちづくり』は他人事のような気がしていたが、今では私も、社会を、まちをつくる一人だという実感が湧いた」

最初は他人事だった社創が、探究や活動の中で、社会やまちをつくる当事者としての自覚を芽生えさせたという、「学びの本質」を捉えています。誰かに与えられるのではなく、何をどうやって学ぶかを自己決定していくからこそ当事者になれるのです。前例を疑い、観点を換え、「これでいいのか」と問い続けること、それが本当の学びです。

ある生徒は、次のように綴っています。「相手の考えを真っ向から批判し、自分の考えを押し通そうとするだけでは絶対にうまくいかないの、自分の考えを主張しつつも相手の考えを受け入れ、協調しながらうまくやることが大切だということを改めて実感しました」

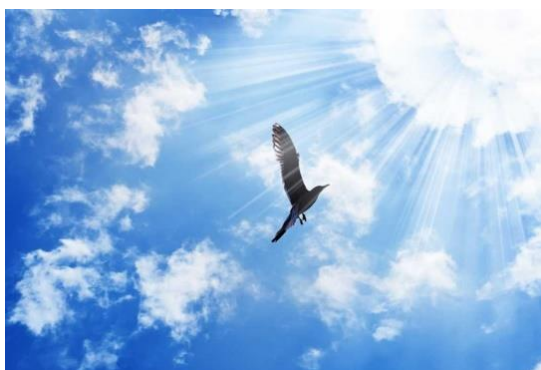
またある生徒は、「まちづくりに対する考えももちろん深まったが、それ以上に私は『支え合うこと』を学んだ」と綴り、ある生徒は「まちづくりは一概に正解という正解はないんじゃないのかなと感じました」と綴りました。

そうです。皆さんは、「点数」では測ることのできない学びを実現してきたのです。社会で求められる能力は点数化できないものがほとんどです。正解もマニュアルもありません。だから簡単には身につけません。だからこそ価値があるのです。「一番大切なことは目に見えない」とは、サン＝テグジュペリの名作「星の王子さま」に何度も出てくる名セリフです。

演劇について、「辛いこともあったが、みんなでひとつのことに向かって突き進む楽しさ、自分たちで一からつくる楽しさ、みんなで話し合うことの大切さ、演劇を通して社会に出てからの大切なことを学んだ」と綴った生徒がいます。

楽しさと苦しさ、その両者が「学び」には存在します。探究の途上では苦しい状況に遭遇することもあるでしょう。思うようにいかない、目標が定まらない、……。そして、必ず訪れる「自己」との闘い。しかし困難に打ち勝っていくことで得られる充実感、高みに登って初めて見ることのできる風景の素敵さを皆さんは味わいました。だからまた学び続けることができます。「学ぶ苦しさ」は「生きる喜び」と同義語なのです。

義務教育学校を巣立ち、それぞれの道へ旅立ちます。希望通りの高等学校へ進学する人もいますが、そうでない人もいます。しかし、この附属での学びがそうであったように、「どこに入るか」が問題ではなく、「入ったところで何をしたか」が重要なのです。附属の卒業生としての誇りを胸に、堂々と歩んでください。（略）



さあ、皆さんは、これから自分のストーリーを創っていきます。監督、助監督、演出、脚本、音響、照明、大道具、小道具、衣装メイク、そして主役、すべてあなたです。あなたにしかできない素敵なオリジナルストーリーを期待しています。

時は永遠ではありません。しかし、皆さんの心にある「自主協同」の精神は永遠です。

巣立ちゆく108名の皆さんに幸多からんことを心よりお祈りして、式辞といたします。